

語学教育に関する学生の意識調査の結果

新潟大学

大学教育開発研究センター 吉永契一郎

実は新潟大の大教センターでも、語学に対して関心を忘れていたわけではなくて、英語についても、初修についても、常に改革の方向を探ってきているのです。私は、英語の改革に関して1年半ほどグループに属しておりまして、英語を教えていらっしゃる先生方と話をしたのですが、どうもうまくいかない。中には、今の英語教育でどこが悪いのだと開き直る先生もいらっしゃいましたので、これはぜひ実証的に問題点を指摘する必要があるというので、私が昨年の夏に、3年生全員を対象にしまして外国語教育に関して調査を行いました。

回答者の属性を見ていただきますと、理学部、農学部、歯学部の回答率が低いのですが、これはどうも8月という時期が、何か実習がいろいろあったりして、学生にとって都合の悪い時期であったというようなことがあったみたいです。それで、女子学生のほうが男子学生よりもよく回答するというのは、これはどんな調査でもそうだと思います。

この回答者に関して一番驚くべきことは何かというと、それはTOEIC、TOEFL、英検を含めた公的検定試験を、62%の人が何らかの形で受けているということなのです。つまり英語の学習に対して非常に関心の高い学生が回答をしてくれたのではないかと考えられます。

詳しい回答は、後ほど年報にでも記載したいと思いますが、ここではあくまでも概報をお伝えしたいのですが、まず英語に関して、自分の能力、読解力、コミュニケーション能力、作文能力、異文化理解について聞いてみたところ、ほとんどの学生が、自分の能力はやや低いか、もしくは低いと考えています。

では、授業に対してはどういうことを期待しているかと聞きますと、これらの項目すべてに関して強く期待しているか、もしくはやや期待する者が半数以上あるということですね。

この中で、コミュニケーション能力の開発を期待するという学生が76%で、これはあらゆる英語の能力の中で突出しています。愛媛大学がああいう改革をされたということは、一つには学生の要求にもこたえるという面があったと思います。私はこれから英語改革の方策を探るときに、これは一つの課題にならざるを得ないというふうに考えます。

それから、読解力、コミュニケーション能力、これらの中で授業への満足度があんまり高くないということが

わかります。

そして、これはちょっと学生が自分勝手だというふうに思われるかもしれませんが、英語を履修している間に熱心に学習したかと聞くと、9.3%しか熱心に学習したと答える学生がいないわけです。これがやっぱり私は今の問題じゃないかなというふうに思います。

それから、回答した学生の73.7%の学生が能力別のクラス編成を支持しています。

これはちょっと驚くべきことなのですが、72.9%の学生が、自分は高校時代のほうが英語の学力が上だというふうに答えているのです。つまり大学に入って2年半がたっているわけなのですが、その間、どうも英語の実力は下がりがっ放しだという認識があるようです。これはほとんど毎日のように英語を勉強していた高校時代と、週に2回か3回勉強していた大学時代の差かもしれませんが、これだけ英語が重要だと言われている時に、高校時代のほうが上だというのは少し問題です。

それから、91.5%の学生が、就職に際して英語が大切であるというふうに考えています。

初修については、以下のような分布が得られています。半数がドイツ語で、それからフランス語、中国語、ロシア語、スペイン語です。

ここで、初修に関しては英語と異なる傾向が出ているのですが、教え方、教材、授業時間数において、学生の半数以上が「強く満足」か、または「やや満足」と答えているのですね。

つまり、先ほど宮崎先生の話にもありましたが、初修は自分で選ぶという選択肢があるせいか、あるいは、またゼロから始まるというフレッシュな感覚があるせいか、初修のほうが一般的には難しいと思われているながらも、英語よりも満足度が高いという結果が出ているのです。

その次を見ていただくと、20.6%が初修を熱心に学習したと言っているわけです。これは英語の倍以上の比率で、学生がこういうふうに答えるわけです。

ただし、全体的に初修がよかったかという点、そうではなくて、半分ぐらいの学生が、もし初修が自由選択であったとしたら、自分は選択していなかっただろうと言っています。選択していたと答えた学生が46.5%です。

それから、やはり半数近くの学生が、初修よりも英語のほうが大切であるというふうに考えています。

学生自身がどういうことを考えているのかというのが一

番よく伝わるのは、学生自身の自由記述です。テストなどでよくわかることだと思のですが、これだけの誤字脱字を見ると、学生というのは、外国語を勉強するよりは漢字の書き取りをやったほうがいいのかというふうに思いますが、それでもこの自由記述の声を一つ一つ見ていると、やはり学生なりにちゃんと考えていますし、ただ怠けたいというとはまたちょっと違うということがわかるのです。

私がこれを読んで感じたことなのですが、英語に関しては厳しくないじゃないかという意見がかなりあるわけです。自分では勉強していないと言いながら、大学は厳しくないなんて言うというのは、随分自分勝手なのですが、これは少し好意的に解釈しますと、厳しく勉強せざるを得ないような仕組みをつくってくれ、と学生は言っているんじゃないかなと、私なんかは解釈いたします。

それから、ネイティブの授業レベルが低いというものもありますし、担当者によって差があるとも言っています。学生自身はコミュニケーション能力の発達を一番希望しているのに、相変わらず英文和訳が多いと。それから、人数が多過ぎるということですね。

能力格差、目的意識が学生の間で違うのに一律に教育をされるとか、目標がはっきりしないとか、きちんとマスターするには授業時間が少ないというような声があがっています。

それから、初修に関しては、圧倒的にやはり授業時間数が少ない。これは多分熱心な学生ほどそういうふうに考えると思うのです。それから、希望の言語が選択できなかったというのは、スペイン語とか、イタリア語なんていうのは非常に人気が高いのです。ところが、開講数が少ないために、あるいは専門科目との時間が競合するために取れなかったことを悔やむ学生が多いわけです。

ただし、初修に関して学生が一番評価する部分はどういうところかという、ネイティブの先生がよかった。そして日本とは違う社会のあり方というものに触れるよい機会になった、と書いている学生が多いのです。

それで、ではどうしたらいいのかというのは、もうこれは第1部のお話を聞かれた方にはほとんどわかると思うのですが、ここでもう一度繰り返しますと、学生に意欲はあると思うのです。これは、自由記述を見てもらえとわかります。ただ、明らかに、これまでの文献中心の語学教育から、もっと人との接触とか、あるいはメディアとか、そういうものを中心としたコミュニケーション能力の育成に求められる能力が変化してきています。これは全部そうなるべきかどうかは別として、やはり英語教育の上に反映せざるを得ないというふうに思います。

それから、幾ら日本語ができるからといって、日本語を外国人に教えるのが難しいように、言語を教えるというのは非常に難しい作業なのです。それから、教授法というのは、これは一つの学問分野ですから、それなりにきちんと進化を遂げているわけです。やっぱりそれに目をつぶって旧来型の授業をずっと続けていくということは、

もうできないのじゃないかなというふうに思います。

だから、きちんと責任を持つ司令塔の役割を果たすような人が、英語教育なり初修外国語教育を統率すべきだということは十分にわかっているのですが、体制作りをどうしたらいいのかというのは難しい問題なのです。仮に良心的な人が一人、これではいかぬと思って自分が代案を出そうと思っても、数十人のネイティブ、あるいは非常勤を一人で何とかするなんてことは、これは不可能に近いのです。やはり何人かがタッグを組んで、一つ一つの問題を解決していく以外に方法はないのじゃないだろうかというふうに思います。

大体アンケートからわかったのは、そういうようなところなのです。

報告1 (質疑・討論)

●司会

では、今の報告につきまして、質疑等ございましたら、よろしくお願ひします。どなたか。どうぞ。

●

先ほどと同じことなのですがけれども、オーラルコミュニケーションというのですか、これを見ていまして、学生はコミュニケーションするという方向へ強く望んでいるというようなアンケートが出ているのですけれども、問題はどの程度の距離感を持っているかということなのだろうと思うのです。だから、実際に例えば読み書きするところが、どこかで使われているというものを身近に感じると、そういうものに入ってくるのだろうと思う。だから、今、多分距離として近く感じているのはオーラルコミュニケーションじゃないかと思うのです。

だけれども、インターネットが普及しまして、今、物すごく様相が変わっているのだろうと思うのです。だから、その辺のところをどういうふうにとらえているのか。恐らく大学の授業の中でも、その部分をいま少しまとめる必要があるのではないのでしょうか。

例えば企業に行ったときに、多分オーラルコミュニケーションの部分というのも非常に重要かもしれませんが、インターネットで情報というのは海外から常に入ってきている部分もあって、その部分に関しては、読み、書きでもって対応しなくちゃならない部分が相当程度にあるのじゃないか。だから、その辺を学生にどう伝えるのかということで、むしろ大学の中での取り組みの方が、世の中が変化していることに対する認識にずれがあるのじゃないのかなという気がするのですが。

●吉永

日本の外国語教育というのは、どうもいびつな感じがします。多分漢文の影響だと思うのですが、その国の言葉を習うのじゃなくて、すべてを日本語に、前に返ったり、後ろに返ったりしながら、日本化して読むわけです。しかも読解中心です。

ところが、外国で第2外国語を学ぶ人たちを見ると、

これはみんなコミュニケーションから入っていくわけです。ですから、日本人が語学学校に行って、プレースメントテストでいい点を取って、上級クラスに行ったら全然言っていることがわからなかったなんていうことはよく起こるわけですが、これはやっぱり、そのねじれというものをそろそろ解消するべき時期なのじゃないかなと思います。

やっぱり四つの技能というのは、どれか一つが突出して開発されるべきものじゃなくて、均等に発達していくのじゃないかなと思うのですけれどもね。

●司会

では、その辺のことを、きょうは非常勤の英語の先生方や、語学の先生方がいらっしゃっていますので、どなたか御意見なり、専門的な何かお話しただけませんかでしょうか。

●ハドリ

非常勤のハドリと申します。

私も日本の外国語教育、ずっと受け身で、外国からいろいろな情報とか知識を受け入れるための学習だったわけですが、これからはやっぱり、先ほどおっしゃられたように4技能、話す、聞くだけじゃなくて、書く、読むも含めて全体的な力を伸ばしていく必要があるのじゃないかというふうに思います。

●司会

ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

●宮崎

私、さっき御紹介いたしました冊子の中でこんなことを書いているのですけれども、日本人の、特に英語かも

しれませんけれども、学習下手ということをおいまして、第1に翻訳に頼ると。それは今、吉永先生がおっしゃった漢文を白文のまま読まず、返り点を打ちながら読む訓読は、まさしく経済的で合理的な漢語の日本語への翻訳であった。同時通訳という点があって、そのあたりが英語とはちょっと違うのですけれども、音声まで一遍にかえてしまう。意味も一遍にかえてしまう。それを英語教育の中に明治以降持ち込んだところに非常に問題があるということ。

それから、一番大切なことは、それはやっても構わないけれども、現場にある英語そのものをまずリプロデュースするというか、自分もこんな英語使っちゃおうかだとか、そういう意識が非常に学習者の中に欠けているのじゃないかと思うのです。

それに加えて、結局、再生意識が非常に低いということは何かといいますと、語彙力をつけようとしなくて、再生力を持つようとしませんから、今度はリプロダクションではなくて、プロダクションの能力が全くなくなってしまう。こういったことを私は思います。

もう一つは、異文化というものだとして、外国語をちゃんと取っていかないということがあると思います。

一番大切なのは、やっぱりリプロダクションをちゃんとやっていこうという、学習のときにそれが必要な気がするのです。

●司会

ではまた全部の報告が終わりました時点で総合的に討議したいと存じますので、次の報告に移りたいと思います。